博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　澤田　ゆかり　　印

学位申請者　林　静（リン セイ）

論　文　名

中国の高等学校におけるトラッキング効果の研究
―「敗者復活」成立の学校過程要因に着目して―

【審査結果】

2026年06月19日、澤田ゆかり（主査）、岡田昭人(指導教員)、倉田明子、加藤美帆、近藤佐知彦（大阪大学）からなる審査委員会は、林静（リンセイ）氏より提出された博士学位請求論文「中国の高等学校におけるトラッキング効果の研究―「敗者復活」成立の学校過程要因に着目して―」の審査および口述による最終試験（公開審査）を実施し、全員一致で博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

【論文の構成】

序章
第1章　研究方法
第2章　中国のメリトクラシー：高等教育大衆化社会における教育競争
第3章　中国G市におけるトラッキング構造の形成・変動およびその要因
第4章　大学進学における「敗者復活」の学校組織要因：大学進学戦略に着目して
第5章「敗者復活」の学校過程要因：下位トラックの教育アスピレーションの加熱
第6章「敗者復活」の学校過程要因の独立効果
終章

【論文の概要】

本論文は、中国における高校教育のトラッキング構造の下で、下位トラックの

高校出身者が大学進学段階で「敗者復活」を実現する現象を取り上げ、その成立要因を学校組織および学校過程の視点から実証的に解明した研究である。各章の内容は以下のとおりである。

序章では、本研究の問題意識、研究目的、先行研究の検討、研究課題および研究方法が提示されている。著者は、中国の高校教育におけるトラッキング研究が高校ランクと大学進学結果との対応関係を中心に論じてきたことを指摘し、その過程において下位トラックの高校出身者が大学進学段階で一定の上昇移動を実現する「敗者復活」に着目したことを説明している。さらに、この現象の要因について、従来の研究は制度的要因、出身階層、学校外教育に求めてきたが、本論文は高校教育過程における学校組織の働きと生徒の教育アスピレーション形成に焦点を当て、中国 A 省 G 市を事例として、その成立要因を解明することを目的として掲げている。

第 1 章は、研究対象地域および研究方法についての説明である。まず、中国における高校教育制度と G 市の位置づけを整理したうえで、G 市を中国の平均的状況を反映する事例地域として選定した理由を示している。さらに、高校 35 校を対象に独自の高校階層構造を構築し、文献調査、公表資料、電子掲示板資料、教員へのインタビュー調査および質問紙調査を組み合わせた研究方法を提示するとともに、複数のデータを相互に照合することによって分析の妥当性と信頼性を確保したことを詳述している。

第 2 章では、中国において教育競争が持続する制度的・社会的背景を検討している。改革開放以降、中国社会では能力主義的な社会原理が浸透し、高等教育の大衆化が進展する一方で、四年制大学への進学が依然として社会的地位形成に重要な意味を持ち続けていること、また高考（中国の全国共通テスト）制度や教育行政における目標責任制を分析して、高校が大学進学率の向上を主たる目標として組織化される制度的背景を明らかにしている。

第 3 章では、中国 A 省 G 市を事例として、高校教育におけるトラッキング構造の形成過程とその変容について分析している。まず、中国における従来のトラッキング研究が、重点校と一般校という二分法を前提として高校間格差を論じることが多かったことを指摘した上で、本章では G 市の高校 35 校を対象に、高校入試合格点、公表資料、学校史、電子掲示板資料などを用いて高校間の序列構造を再構成している。

続いて、新中国成立以降の高校教育制度の展開を、重点校制度の形成、文化大革命期の中断、改革開放後の再建、高校教育の普及と再編という歴史的過程に即して整理し、高校教育の拡大とともに高校間の序列構造が変化してきたことを明らかにしている。また、G 市では、重点校・一般校という単純な二層構造から、

重点校内部の細分化を含む多層的なトラッキング構造へと移行していることを示し、この構造を「縦型ブロック構造」と概念化している。

さらに、高校入試合格点や大学進学実績の推移を分析することにより、高校間格差が維持される一方で、中位校・下位校にも一定の四年制大学進学機会が存在することを示している。その背景として、高校教育の普及、学齢人口の変化、高校統廃合による教育資源の集中、重点校政策、地方財政改革など、教育制度と社会構造の双方の変化が高校間序列の再編に影響を及ぼしたことを論じている。

以上の分析を通じて、本章では、中国の高校教育におけるトラッキング構造が固定的なものではなく、制度改革や社会経済環境の変化に応じて再編されてきたことを明らかにするとともに、後続章で検討する「敗者復活」の成立条件となる高校間構造の特徴を提示している。G市の事例では、高校間の学力格差に加えて教員の配置や教育費の面でも顕著な格差があり、下位トラックの学校は「敗者復活」に不利な条件下にあることが確認されている。

第4章では、高校教育における「敗者復活」を可能にする学校組織要因について分析している。まず、高校ランク別の四年制大学進学率および重点大学進学率の推移を整理し、高校間には依然として大きな進学格差が存在する一方、中位校・下位校においても一定数の生徒が四年制大学へ進学していることを示している。また、2010年代の大学入試制度改革と模擬試験における四年制大学合格ラインが高校間の進学実績に及ぼした影響を論じている。

続いて、高校へのインタビュー調査および収集資料をもとに、各高校が大学進学率向上のために採用している教育実践や組織運営の実態を分析している。具体的には、学習時間の延長、習熟度別クラス編成、文系・理系の選択指導、芸術・体育系入試の活用、高職単招（高等職業院校が全国共通テストを経ずに独自の試験で学生を募集選抜する制度）の利用など、学校ごとに異なる進学戦略が講じられていることを明らかにしている。また、これらの取組は高校ランクによって特徴が異なり、上位校では重点大学進学を志向した指導が行われる一方、中位校・下位校では四年制大学への進学率向上を重視した教育課程の編成が行われていることを示している。

さらに芸術・体育系入試や高職単招の位置づけについて検討し、一般入試以外の進学ルートが高校教育における進路指導の重要な構成要素となっていることを論じている。また学校組織が大学進学実績を向上させるため、生徒の学力や進路希望に応じて教育資源を重点的に配分し、多様な進学経路を組み合わせながら進学機会の拡大を図っている実態を明らかにしている。

以上の分析を通じて、本章では、高校間のトラッキング構造の下においても、学校組織が教育課程や進路指導を戦略的に編成することにより、中位校・下位校

の生徒にも四年制大学への進学機会が生み出される過程を具体的に明らかにしている。

第 5 章では、高校教育における学校過程が、生徒の教育アスピレーションの形成に及ぼす影響について分析している。著者は、高校入学時点で形成される教育アスピレーションと、高校在学中の学校生活を通じて形成・変化する教育アスピレーションとを区別し、学校組織による教育活動が生徒の進学意識にどのような影響を及ぼしているのかを検討している。

まず高校ランク別に「生徒の希望大学ランク」の変化を分析した結果、高校入学時には高校ランクに応じた教育アスピレーションの差が見られること、その一方で高校在学中の変化は必ずしも高校ランクだけでは説明できないことを示している。さらに、上位クラス、普通クラス、芸術クラスなど学級編成ごとの分析を行い、同一高校内においても所属する学級によって教育アスピレーションの変化に違いがみられることを明らかにしている。

続いて、学校における模擬試験や進路指導の実態を分析し、四年制大学合格ラインを基準とした学力評価や進路指導が、生徒の進学可能性に対する認識や進学意欲の形成に影響を及ぼしていることを論じている。また、芸術・体育系入試など複数の進学経路が提示されることにより、生徒が大学進学への可能性を認識し、それが教育アスピレーションの維持や変化に関わっていることを示している。

以上の分析を通じて、本章では、生徒の教育アスピレーションは、高校入学時の学校ランクのみによって規定されるのではなく、高校在学中の学級編成や進路指導、学力評価など学校過程の影響を受けながら形成・変化することを明らかにするとともに、高校組織による教育活動が生徒の進学意識の形成に重要な役割を果たしていることを示唆した。

第 6 章では、第 4 章および第 5 章で明らかにした学校組織や学校過程に関する知見を踏まえ、それらの要因が生徒の教育アスピレーションに及ぼす影響について統計的に検証している。分析には、A 省 G 市の高校 10 校に在籍する生徒を対象とした質問紙調査データを用い、希望大学ランクを従属変数とする順序ロジスティック回帰分析を実施している。

分析では、家庭背景、生徒個人の属性、高校ランク、学級順位、学年順位、進学に対する自己評価、進学経路に関する選択など、多様な要因を段階的に投入し、それぞれが教育アスピレーションに及ぼす影響を検討している。その結果、高校ランクや親の教育期待に加え、学級順位、四年制大学への合格可能性に対する自己認識、芸術・体育系入試への参加意向などが教育アスピレーションと有意な関連を有することが確認できた。一方で、文系・理系の選択や上位クラスへの

所属などについては、他の要因を統制した場合には有意な影響が認められないことを明らかにしている。

また、学年順位ではなく学級順位が有意な関連を示したことから、生徒の教育アスピレーションは学校全体における位置づけよりも、日常的に所属する学級集団の中で形成される相対的な自己評価と深く関係していることを論じている。さらに、「高職単招」への進学意向は教育アスピレーションと負の関連を示すのに対し、芸術・体育系入試への参加意向は正の関連を示すことから、学校が提示する複数の進学経路が生徒の進学意識に異なる影響を及ぼすことを考察している。

以上の分析を通じて、本章では、高校教育における教育アスピレーションは、生徒個人の属性や家庭背景だけではなく、高校ランクや学校過程、学級集団における位置づけなど複数の要因が相互に作用することによって形成されることを実証的に明らかにしている。

終章では、本研究全体の分析結果を総括するとともに、その学術的意義と今後の課題について論じている。まず、本研究で設定した三つの研究課題に対応させながら、第 3 章から第 6 章までの分析結果を整理し、中国の高校教育におけるトラッキング構造の形成過程、「敗者復活」を可能にする学校組織要因、および教育アスピレーションを形成する学校過程要因について、それぞれの知見を総合している。

そのうえで、中国の高校教育では、高校間の序列構造が存在する一方、学校組織が教育課程や進路指導を戦略的に編成することにより、中位校・下位校においても四年制大学への進学機会が生み出されていることを指摘している。また高校教育では、教育資源の配分や進路指導が「四年制大学合格ライン」を中心として組織されており、この合格ラインが生徒の学習行動、進路選択および教育アスピレーションの形成に大きな影響を及ぼしていることを、本研究全体を通じた分析結果として位置づけている。

さらに、本研究の学術的意義として、中国の高校教育におけるトラッキング研究を高校間格差の分析にとどめず、学校内部の教育過程や学校組織の働きに着目して検討したこと、ならびに学校組織と教育アスピレーションとの関係を実証的に分析したことを挙げている。また、高校教育における「四年制大学合格ライン」を分析視角として提示した点についても、本研究の成果として整理している。

最後に、本研究では A 省 G 市を対象とした事例分析であったことを踏まえ、今後は他地域との比較研究や、高校教育制度の変化を踏まえた継続的な検討が必要であることを課題として示すとともに、教育アスピレーションの形成過程

や高校教育におけるトラッキング構造に関する研究をさらに発展させる必要性について言及している。

【審査の概要】

本論文に対する公開審査は、2026年6月19日(金)10:30から約2時間をかけて、本学中会議室およびZOOMによるオンライン配信のハイブリッド形式で実施された。審査員の構成は、澤田ゆかり（主査）、岡田昭人（主指導教員）、倉田明子、加藤美帆、および外部審査員の近藤佐知彦（大阪大学）の5名であった。審査では、冒頭に著者から本論文の概要と趣旨について説明があり、その後に各審査員との間で質疑応答が行われた。

本論文は、以下の点で高く評価された。

従来の研究が高校ランクと大学進学結果との対応関係に重点を置いてきたのに対し、本論文は中考から高考に至る学校内部の教育過程に着目し、高校組織の戦略や生徒の教育アスピレーションの形成過程を実証的に解明している。

また、日本と中国の学歴社会研究を丁寧に整理したうえで、ローゼンバウムや竹内洋らの理論を参照した上で、中国の高校教育を対象とする独自の分析枠組みを構築していること、さらに中国社会の変化や高校教育制度の展開を踏まえて、高校段階のトラッキング構造を歴史的・制度的観点から位置づけた点にも学術的意義が認められた。

実証面では、中国A省G市を対象として、高校35校に関する公表資料、長期間にわたる統計データ、アンケート調査、インタビューなど多様な資料を収集・分析するとともに、豊富な実証データに基づく議論を展開していることが高く評価された。特に、下位トラックの高校が学習時間の延長、習熟度別クラス編成、文系選択、芸術・体育系入試、「高職単招」入試などを組み合わせながら大学進学実績の向上を図る学校組織としての戦略的行動を明らかにしたことは、中国の高校教育の実態に新たな知見を提供するものである。

その一方で、本論文に対する問題点や疑問点として、以下が指摘された。

第一に、本論文は「敗者復活」を通じた学歴メリトクラシーの再動員過程を細かく描き出すことに成功しているが、大卒の就職難に見られるような学歴インフレの進行による競争からの撤退と無気力化、「寝そべり族」や「潤（海外留学による受験競争の回避）」につながる部分は十分に扱っておらず、中国の進学競争の渦中にいる若者が「人生の成功」をどのように捉えているか、という点がわかりづらい、との指摘があった。これらの点に関する議論に発展させれば、教育アスピレーションの「加熱」だけでなく「冷却・離脱・拒否」を含む中国型メリトクラシーの両義性をより明確にできる、との意見が示された。

第二に、トラッキングの効果の影響に関する問題が挙げられた。本論文では学校の進学戦略に重点を置いているが、本来「トラッキング」は、同質性を確保することを意味するので、学校の方針とは別に同質化集団による影響も考察すべきであった。たとえば上位校と下位校の生徒の学習行動の違いは、学校文化の違いとして捉えることもできるのではないか、との質問が寄せられた。また本論文は、「敗者復活」は限定的だが可能である、という視点で記述されているが、逆に言えば「敗者復活は構造的に難しい」という結論になることが指摘された。

第三に、著者の問題意識と観点に関する質問が出された。本論文は、上位校も下位校も同じ目標=「大学進学率を挙げる」に向かって邁進していることをよく表しているが、その目標自体の是非や価値観の問題に関する著者の議論は不在である。著者の問題意識は「なぜ敗者復活が可能なのか」という形で明示されているが、「敗者復活を望ましいものと考えているのか否か」についてもう一歩踏み込んで説明すると本論文の意義がより明確になった、との見解が示された。

第四に、実証部分について、第5章および第6章の分析対象について、説明が求められた。これらの章では「実際の進学結果」ではなく「希望大学ランク」という教育アスピレーションを用いている。それが、論文全体で掲げる「敗者復活」とどう対応するのかをより丁寧に説明する必要があった。また本研究は中国A省G市を対象とした事例研究であるが、その成果を中国全体の教育システムや「中国型選抜メカニズム」へと一般化する際には、より慎重な位置づけが必要である、との意見が出た。

さらに中国の複線型高校教育制度や普通科高校の位置づけについて、やや説明不足の感があり、補足説明を加えることで本研究の意義がより理解しやすくなるとの指摘があった。

以上の問題点と質問について、林氏の回答は以下のとおりである。

第一の指摘に対しては、就職難の実態は完全失業ではなく「学歴に相応しい“良い仕事”」をめぐる競争である。大学進学はそれを保証するものではないが、そもそも学歴がなければスタートラインに立てないという認識が共有されている。また大学進学は、象徴的な社会的地位としての意味が大きく、親族から見下されないよう親の立場を守るという「親孝行」の実践でもある。その意味で「人生の成功」は公務員と国有企業への就職である。ただし、それを実感するのは大学生になってからで、受験競争の渦中にいる高校生にとって「人生の成功」は有名大学への入学であり、その先のことは考えられない状態にある。

第二の指摘に対して著者は、フィールドワークの際に上位校と下位校では自習時間の学生の行動選択が異なると気づいたこと、また敗者復活の構造的な難しさを認めつつも、今の中国は推薦入試の縮小や普通高校以外からの大学進学

枠の上限撤廃など、復活の可能性を拡大しうる動きが観察できることを述べた。

第三の指摘については、著者の当初の問題意識は「敗者復活は代償が高すぎる」というものであった。しかし「敗者復活には出身階層の影響を弱める可能性がある」という点は見逃せない、と考えるようになった。そこで、まず敗者復活が可能になる実態を明らかにすることに専念した、との説明があった。

第四の指摘については、生徒の実際の進学結果データの入手が困難であったこと、またトラッキングの「加熱」「冷却」を示す上で、アスピレーションが有用であることが述べられた。またG市を「中国型」と呼ぶことの問題点を認めつつ、進学状況や経済水準の面で特殊な都市ではないことを付け加えた。その他、複線型高校教育制度等に関する説明不足については、補足説明を心がけるとの表明があった。

以上のように質問に対する林氏の返答は問題点を自覚したうえでの誠実なものであり、今後の研究における改善や発展を示唆するものであった。

公開審査終了後、審査委員会で審議を行った結果、本論文は豊富な実証資料に基づき、中国における高校教育と学歴社会の形成メカニズムを新たな視点から解明したものであり、独創性、実証性および論理構成のいずれにおいても博士論文として十分な水準に達しているものと評価された。以上に基づき、審査委員会は全員一致で、林氏に博士（学術）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。